

公園のあり方 シンポジウム2026 ニュースレター

～ガーデンシティ恵庭
公園の未来をみんなで考える日～



開催目的

恵庭市では、令和5年度から「恵庭市公園のあり方等検討委員会」において、公園のあり方について検討を重ねてきました。

「公園のあり方シンポジウム2026」は、令和8年3月に同委員会が取りまとめた提言書の内容を市民と共有し、これからの公園づくりを市民とともに考える場として開催しました。

開催概要

日時 令和8年7月11日（土）
13:30～16:10

会場 北海道文教大学
本館2階 大講堂

主催 恵庭市

開催プログラム

1. 開会・市長挨拶
2. 基調講演「これから公園をもっと育てる」
(町田誠氏)
3. 提言書について
(椎野 亜紀夫氏)

4. あさひ公園の取組
(黒崎 暁子氏)
5. 公園コンシェルジュAI
(平井 梓氏)
6. パネルディスカッション
(小磯氏、町田氏、富永氏、
椎野氏、原田市長)

開会挨拶



恵庭市長 原田 裕

「公園に求められる役割は、地域や時代によって変わります」と述べ、地域の高齢化や新たな若い世代の居住など、状況の変化に応じた公園づくりの必要性を強調。「この提言をもとに、これからの恵庭市の公園のあり方や管理の仕方について実現したい」と、市として提言を今後に生かす考えを示しました。

「シンポジウム当日の様子は
「You Tube」」で配信中です



基調講演「これから公園をもっと育てる」



町田 誠氏
一般財団法人公園財団 常務理事
横浜国立大学大学院 客員教授
元国土交通省 公園緑地・景観課長

人口構成や社会状況が大きく変わる中、町田氏は「公園をもっと育てる」ことを軸に、これからの公園は「つくる」だけではなく、どう管理し、どう運営し、どう使うのかを考える時代だと提起しました。

公園は「まちづくりのツール」

公園そのものをどうするかだけではなく、「そのまちをどうしたら良くできるか」を考える。そのための一つのツールが公園です。行政だけではなく、地域や民間など、いろいろな人が関わりながら公共空間を使いこなしていくことが大切です。

「できない」ではなく、「どうすればできるか」

行政や管理者がすべてを用意するのではなく、「こんなことをやってみたい」という人が、自分で活動できる環境をつくる。そうすると、人がいなかった公園が、人のいる公園に変わっていきます。私は、それがまちづくりだと思っています。

「量」から「使いこなし」へ

日本は何十年にもわたって公園をつくり続け、量的にはかなり充足しています。これからは、さらに数を増やすというより、今ある公園をどう使いこなし、市民の豊かな生活を支える場所として機能させていくか。そこに力を入れていく必要があります。

「禁止」ではなく、「何ができる公園なのか」

苦情があるたびに禁止事項を増やすのではなく、地域のみなさんで話し合い、「この公園ではどういう使い方ならいいのか」という“ハッピーなルール”をつくるのが大切です。「何をしてはいけないか」ではなく、「何ができる場所なのか」を示す。公園のルールも、そういう方向へ変わっていく必要があります。

提言書について

「恵庭の特性を活かした公園のあり方に関する提言」では、持続可能な公園の管理運営に向け、3つの観点から今後の方向性を示しています。椎野亜紀夫氏から提言の全体像について、黒崎暁子氏、平井梓氏からは、提言に関連するこれまでの取組とその成果について紹介がありました。

恵庭の特性を生かした公園のあり方に関する提言～ガーデンの魅力を高める公園づくり



椎野 亜紀夫 氏
恵庭市公園のあり方等検討委員会 委員長
札幌市立大学 デザイン学部 教授

委員会では施設の老朽化、利用ニーズの多様化、担い手不足、公園樹を含む安全・安心、公園トイレの5つの課題解決に向けた試行を実施し、提言をまとめました。提言の考え方として「選択と集中」を掲げ、利用実態・安全・アクセス・防災・コスト・地域合意から優先順位を考える必要性を示しています。最終的に公園DX／公園の個性を活かした管理運営／公園トイレの適正配置の3つの方向性を提言書で示し、これからは、公園の「量から質へ」の転換が必要だと考えています。

地域と取り組む公園管理について（あさひ公園）



黒崎 暁子 氏
樹木医

あさひ公園では、町内会、市、指定管理者、専門家などが一緒に公園を歩き、まず現場の課題を共有するところから始めました。その上で、「地域でできること」「指定管理者ができること」「専門家に任せること」など、それぞれができることを整理して取り組みました。

その結果、公園が明るくなり、安全面の不安が減り、利用する人も増えてきました。でもそれ以上に大きかったのは、何かあったときに関係者同士で相談できるようになったことです。「行政に何とかしてほしい」ではなく、「どうしたらよいか一緒に考える」。そんな関係をつくるのが、公園をより良くしていく上で大切だと感じています。

公園コンシェルジュAIについて



平井 梓 氏
まちづくりスポット恵み野
事務局長

「ブランコのある公園はどこ?」「どうしてこの木を切ったの?」など、公園について知りたいことがあっても、必要な情報をすぐに見つけるのは意外と難しいものです。公園コンシェルジュAIは、恵庭市の公園情報や日々の管理記録などをもとに、こうした疑問に答える仕組みです。

まだ成長途中ですが、管理者が情報を蓄積し、市民が使って質問することで、AIの情報も充実していきます。ぜひ、みんなで使いながら、一緒に育ててほしいと思います。

「提言書」はこちらの
QRコードを読み取って
ください



パネルディスカッション

テーマは「提言を未来へ! みんなでつくる恵庭の公園」。小磯修二氏の進行で、町田誠氏、椎野亜紀夫氏、富永一夫氏、原田市長が、提言をどう実践につなげるか議論しました。小磯氏は、人口減少や財政制約の時代には「つくったものをどう使うか、どう管理するか」が政策の質として問われると問題提起しました。

Q. なぜ今、公園のあり方を考えるのか?

原田市長：以前は子どもが多かった地域でも高齢化が進み、公園がほとんど使われなくなった一方、新しい住宅地では若い世代が入り「遊具がない」という声がありました。

住む人や世代が変われば、公園に求めるものも変わる。専門家だけでなく市民にも参加いただき、これからの恵庭の公園を考えるため検討委員会を設置しました。



Q. 一律禁止ではなく、どうしたら「できる」のか?

富永氏：最初から「できない」と考えるのではなく、地域や使う人に合わせて柔軟に考える。ふるさと公園の市民農園も、その一例です。

町田氏：すべてのリスクをゼロにしようとする、公園の個性はなくなります。法律や条例に本当に禁止されているのかを確認し、「どうしたらできるのか」を考えることが大切です。



Q. 公園DXは何を変えるのか?

町田氏：まず基礎となるデータを整え、市民からも情報を入れてデータを育てる。AIが学習する双方向の仕組みに。

椎野氏：24時間365日の問い合わせを補完する有効なツール。一方で、使わない人への配慮や「恵庭のこの公園らしさ」をどう反映するかも重要。

富永氏：効率化だけでなく、市民のニーズを蓄積し、未来の公園管理に生かせる可能性があります。

Q. 地域と一緒に公園を育てるには?

椎野氏：あさひ公園では、行政、指定管理者、地域、企業、専門家などが一緒に現場を歩き、「ここが問題だ」と課題を共有しました。そこから「自分たちは何ができるのか」を考えるようになりました。多様な主体に関わってもらうには、最初から役割をお願いするのではなく、まず現状や課題と一緒に共有する場をつくるのが重要です。

参加者の声



町田さんの「今までの30年間と同じことを続けていては、問題は解決しない」という言葉が印象に残りました。

あさひ公園の取組は、地域と行政と一緒に公園を育てていく好事例だと感じました。

ファイターズ2軍施設に関連する公園づくりにも、市民の声を取り入れてほしいです。